

令和六年度 お茶の水女子大学 文教育学部

学校推薦型選抜 帰国生徒・外国学校出身者特別選抜

高大連携特別選抜 試験問題 人文科学科

※哲学・倫理学・美術史プログラムを志望する者は、【問題1】を、

比較歴史学プログラムを志望する者は、【問題2】を、

地理環境学プログラムを志望する者は、【問題3】を、

それぞれ解答しなさい。

## 令和六年度 お茶の水女子大学

### 学校推薦型選抜 帰国生徒・外国学校出身者特別選抜 高大連携特別選抜 試験問題

#### 文教育学部 人文科学科(哲学・倫理学・美術史) 小論文

【問題Ⅰ】 以下の文章を読んで、問一、問二に答えなさい。

ドイツの思想家ヴァルター・ベンヤミン(一八九二―一九四〇)が「複製技術時代の芸術作品」(一九三六)で提示した、「礼拝的価値」と「展示的価値」の対概念は、何らかの芸術や文化について分析する際、今もなお便利な思考の道具である。

ベンヤミンは以下のように論じる。芸術作品は、歴史の初期の段階では、魔術的な儀礼に用いるために制作された。たとえば、石器時代の人間が洞窟の壁に描いた、鹿などの動物の絵がそうである。それらの絵画は、人間に見られることよりも、神や精霊に見られることのほうが重要であった。中世の教会に祀られたある種の神像も、選ばれた聖職者にしか、それに近寄ることが許されなかった。芸術作品の礼拝的価値とは、このような状況で重んじられるものである。ここでは、芸術作品を人びとの目から隠れた状態に保つことが、しばしば重視された。

一方、芸術作品が儀礼的な用途からやがて解放されていくにつれ、その展示的価値が、次第に優位になっていく。たとえば、教会に固定された神像よりも、博物館や美術館に展示しやすく、一般市民の興味もそそる彫刻や絵画のほうが、高く評価されるようになる。あるいは、クラシックの演奏会では、ミサ曲の宗教的な荘厳さよりも、交響曲の親しみやすい魅力のほうが、重宝されるようになっていく。

礼拝的価値から展示的価値への重心の移行は、写真に代表される複製技術の登場によって、急速に進む。世界に一つだけの芸術作品を、その時その場でのみ礼拝するのではなく、いくらでも複製可能な作品が、いつでもどこでも、不特定多数の人びとによって眺められ、聴かれ、楽しまれるようになるからである。

もっとも、複製技術の時代にあっても、礼拝的価値が全面的に撤退するわけではない。ベンヤミンが例として挙げるのは、自分の恋人や親しい故人の肖像写真である。自分にとってあまりにも特別な存在を写したそれらの作品は、強い情動や哀愁の念をかき立てて、個人の内面に礼拝的価値を回帰させるのだ。(中略)

明治初期の廃仏毀釈の後、仏像が美術概念に取り込まれて美術品と化していく過程は、その礼拝的価値が後退し、展示的価値に委ねられていくプロセスとして理解できる。かつて寺院の儀礼に用いられていた仏像は、博覧会や博物館で展示され、写真に撮られ、美術書に掲載されるなか、礼拝の対象であることから遠ざかっていった。秘仏として隠されていた法隆寺夢殿の救世観音は、その封印を解かれ、美術研究のために白日のもとにさらされた。秘仏を公開すると仏罰が下るといって、僧侶たちのあいだで共有されていた礼拝的価値は、展示的価値を希求するフェノロサや岡倉天心によって、抵抗もむなしく撃退されたわけだ。(中略)

では、仏像写真の場合はどうだろうか。写真は、仏像を寺院の空間から切り離して、美術品として自立させるメディアである。しかも、複製技術であるがゆえに、世界に一つだけの仏像と触れあう価値を相対化させ、その姿や表情を、あらゆる場所で自由な時間に鑑賞できるようにする。仏像の展示的価値を高めた大きな要因の一つが、仏像写真であったことは間違いない。(中略)

たとえば、随筆家の串田孫一(くしだまごいち、一九一五―二〇〇五)が、「仏像の絵と写真」という文章を書いている。串田は幼年時代、寺を訪ねて薄暗い本堂で仏さまに直面した際、お辞儀をして、手をあわせていた。それは信仰心というよりは、仏さまは妙な力を持っていて、何をされるかわからないからという気持ちから、とりあえず拝むのであった。

中学生になった彼は、よその家に遊びに行ったとき、その客間の壁に、興福寺の阿修羅像の、かなり大きな写真が飾ってあるのを見た。すると、「それまで仏さまであったものがその写真を見たときに、私にとっては仏像になった」。

つまり、拝むとか、若干の怖れを感じていたものがこうして額に入れられ、客間の壁に飾られているのが、異様に感じとられると同時に、これまでとは全く違った対象となった。美の対象となったとまでは言い切れないが、私は椅子を立てて写真の近くへ寄り、ガラスの反射をよけて、顔を見たり、折りまげた腕を見たり、いたるところ

ろに走っているひびを見た。

写真の登場によって、仏像が礼拝対象から展示対象へと一変していく様子が、実に鮮やかに描き出されている。知人の家の室内に掲げられた、大判の仏教写真との遭遇により、それまで串田のなかで畏怖すべき「仏さま」であったものが、その表情やかたちの細部をじつと目で追うべき、「仏像」と化したのである。

串田はその後、古本屋で仏像写真を購入するようになり、それらを自分の部屋の壁に飾るようにもなった。買ったのは、広隆寺と中宮寺の弥勒（観音）菩薩や、法隆寺の百済観音などの写真だが、それらを選んだ理由は、顔つきや姿が美しいからであった。また、仏像の写真うつりの良し悪しも、意識しながら選択した。

こうして日本の代表的な仏像の写真を鑑賞し続けていた彼は、小学生の頃から久しぶりに、奈良を訪れた。小学校時代は寺や仏像にほとんど興味がなく、鹿をおもしろがったりするだけであった。だが、今回は仏像が目当てである。そして、写真に収まっていた仏像の実物を見るため、意気揚々と寺院に参った。ところが――

写真によって多少なりとも仏像について知識をもって再び訪れると、自分の期待は一つ一つ見当ちがいだつた。むしろ実物を見て改めて感動したのも幾つか教えあげられるけれど、期待を勝手にふくらませすぎて、がっかりしたものであった。

自分のお気に入りの仏像写真を、自宅で毎日のように見ていた串田には、当該の仏像の実物が、意外にも魅力的に見えなかった。これは、いったいなぜだろうか。

串田のなかで、彼の部屋に飾られた仏像写真が、新たな礼拝的価値を帯びるようになっていた。おそらく、そういうことである。自分で選んだ仏像写真を通して、彼は個々の仏像が表現している美とは何かを、ずっと考え続けていた。その結果、それらの仏像写真と自己とのあいだで見出される美にこそ、彼は価値をおくようになった。ゆえに、当該の仏像の現物を実際に見ても、そこに彼が信じる美を発見することができず、「がっかり」してしまったのである。

彼が古書店で手に入れた仏像写真そのものは、もちろん複製技術の産物であり、彼の部屋以外にも、全国の各所で展示・販売されていただろう。仏像写真それ自体は、展示的価値しか持たない。だが、それらの写真を、私的な空間で何度も鑑賞し、そこから個人に固有の美意識が養われたとき、それらの写真は、もはやただの鑑賞対象ではない。むしろ、美に対する彼の精神を高尚にしてくれる、礼拝対象の一種と化している。（以下略）

碧海寿広『仏像と日本人』中公新書 二〇一八年 より（一部改変）

問一 傍線部「それまで串田のなかで畏怖すべき「仏さま」であったものが、その表情やかたちの細部をじつと目で追うべき、「仏像」と化した」とはどのようなことか二〇〇字以内で説明しなさい。

問二 現代は、様々なメディアが溢れ、複製されたイメージから情報を得ることが多い。しかしその一方で、展覧会や寺社はしばしば大混雑し、「実物」との接点を持つ機会を求める現象が生じている。「礼拝的価値」と「展示的価値」の錯綜する現代において、「礼拝的価値」とは何か、あるいはそれを担っている「実物」とは何か、あなたの考えるところを六〇〇字以内で述べなさい。

令和六年度 お茶の水女子大学

学校推薦型選抜 帰国生徒・外国学校出身者特別選抜 高大連携特別選抜 試験問題

文教育学部 人文科学科(比較歴史学) 小論文

【問題2】次の文章を読み、問一、問二に答えなさい。

歴史家自身の時代背景はその問題関心のみならず、史料の解釈にも影を投げかけることがある。すなわち、歴史家は自分の理解できる形で過去の出来事をしばしば解釈してしまうため、その歴史記述は過去の忠実な描写よりも、著作家の時代文脈に合わせた形になってしまっていることがある。ただし、このような時代錯誤は、無意識になされてしまうものもあれば、意識的に行われるものもある。そのような事例を一つ取り上げてみよう。

キリスト教を公認したことで有名なコンスタンティヌス帝(在位三〇六―三三七)は、治世初期にローマ市近郊で合戦を行った。相手方の圧倒的兵力に不安を覚えていた帝は、神からの啓示を得て、戦勝のためにその神のしるしを兵士たちの盾に描かせたという。これが、皇帝がキリスト教に「改宗」した経緯である。さらに、勝利を収めてローマ市に入った帝は、キリスト教への信仰を示すためにローマ教皇から洗礼を受け、その見返りに膨大な寄進を行ったという。また、コンスタンティヌス帝が三位一体の「正統」信仰を擁護し、異説を唱えたアリウスを異端としたという説明も教科書で目にしたことがあるかもしれない。

しかし、同時代に近い史料を見るかぎり、コンスタンティヌス帝が洗礼を受けたのは死の直前であり、しかもその洗礼を授けたのは、いわゆるアリウス派の聖職者たちだったと推測される。「正統」信仰の擁護者アタナシウスも皇帝の治世晩年には追放措置にあっていた。

このような情報の食い違いは、コンスタンティヌス帝の事績が伝えられる中で後代の解釈が加わったために起こった。例えば洗礼は、死の直前など、罪からの清めを最も必要とするときに行うのが、帝の時代には普通だった。それに対し、後世ではキリスト教を信じたら、すぐ洗礼を受けるのが普通だったので、帝の洗礼の時期は前にずらされた。また、敬虔なキリスト教皇帝が異端の聖職者たちと密接に交わり、洗礼まで授けられたというのは、「正統」とされたアタナシウスの信仰を信奉していた後世の人びとには受け入れがたいものだったから、ローマ教皇が洗礼を施したことに改変される。このように後の時代の慣習や考え方が、史実を意図的に、あるいは無意識のうちに塗

り替えてしまうことは歴史では広く起きうることである。さらに、このアナクロニズムは、洗礼を受けたことへの感謝として帝がローマ教皇に西方の実質的な支配権を譲ったというコンスタンティヌス帝の寄進伝説へと発展していき、中世教皇権を理念的に支えるものとなっていく。ここまでくると、アナクロニズムは単なる間違いを通り越して、一つの政治的言説として新たな生命を与えられたと言えよう。

これだけを述べると、史実とはかくも不確定なものかと思われるかもしれない。しかしここで強調しておきたいのは、歴史というのは常に引き継がれ、人の手が加えられていくものであり、その伝承の過程には、加工を施した人びとの考えや信念が間違いなく投影されているということである。このようなアナクロニズムは古代人や中世人ばかりではなく、現在の私たちもしばしば行っており、後世の人びとが史実と考えた物語が人びとを結束させて動かす原動力になることさえある。史実の発生前、史料の作成年、アナクロニズムへの理解を深めることは、人びとによって操作・加工・信奉されやすい歴史という素材に対して真正面から向き合い、人間がいかなるものをその時々で信じるのかという観察眼を深める立脚点になろう。

（田中創「時間をどう把握するのか―暦と歴史叙述」東京大学教養学部歴史学部会編『歴史学の思考法』岩波書店、二〇二〇年。引用にあたり一部省略・改変した。）

問一 著者は歴史学における「アナクロニズム」をどのようなものと捉え、それに対してどのような主張をしているか。本文の内容に即して、二〇〇字以内で述べなさい。

問二 傍線部「歴史家自身の時代背景はその問題関心のみならず、史料の解釈にも影を投げかけることがある。」というようなことは「時代背景」だけでなく「地域的な背景」についても言えることである。ある歴史事象に対して異なる二つの時代、あるいは異なる二つの地域から見たときに問題関心や解釈に差異が生じることについて、具体的な事例をあげて六〇〇字以内で述べなさい。なお、比較する時代や地域の範囲に制約は設けない。

令和六年度 お茶の水女子大学

学校推薦型選抜 帰国生徒・外国学校出身者特別選抜 試験問題

文教育学部 人文科学科(地理環境学) 小論文

【問題3】次の文章は、地理学における空間の概念と場所の概念の重要性を論じている。この文章を読み、問一と問二に答えなさい。

この部分に記載されている文章については、著作権法上の問題から掲載することができませんので、ご了承ください。

この部分に記載されている文章については、  
著作権法上の問題から掲載することが  
できませんので、ご了承ください。

この部分に記載されている文章については、  
著作権法上の問題から掲載することが  
できませんので、ご了承願います。

出典：イーフト・トウアン著、山本浩訳『空間の経験』筑摩書房 1993年

(一部改変があります)

問一 傍線部に示された二つの疑問文のうち一つを選び、本文を参考にしながら、二〇〇字以内で  
その答えを述べなさい。

問二 あなた自身の旅行の経験、地誌書の読解の経験を事例に、人間にとっての空間と場所の重要  
性について、六〇〇字以内で論じなさい。



# 令和六年度 お茶の水女子大学 文教育学部

## 学校推薦型選抜 試験問題

### 言語文化学科(日本語・日本文学プログラム)

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

このほど私は、エマニユエル・ロズラン Emmanuel Lozerand とらうフランスの日本研究者の *Littérature et génie national. Naissance d'une histoire littéraire dans le Japon du XIX<sup>e</sup> siècle* (Les Belles Lettres, 2005) という本を「文学と国柄——一九世紀日本における文学史の誕生」というタイトルで、現代アイルランド文学及びフランス文学専攻の鈴木哲平氏と共訳し、岩波書店から刊行した(二〇二二年二月刊)。まず本書の概要を紹介させていただきたい。

原書のタイトルにある *génie national* は、一般的には「国民的精神」とでも訳すべき語であるが、それを本書で「国柄」と訳したのは、一八八八年に東京大学文学部(当時は正確には「帝国大学文科大学」だが、本稿では通称としてこの呼称を用いる)和文学科の教師と学生たちが協働して発刊した雑誌『日本文学』の創刊号巻頭に掲載された「日本文学発行の趣旨」に、「人の性質品位を人柄と謂ひ、国の性質品位を国柄と謂ふ。人柄の如何を知らんと欲せば、其の人の経歴態度に就いて之を観るべく、国柄の如何を知らんと思はば、其の国の文学を以て之を徴すべし。」とある「国柄」を、著者が *génie national* と仏訳していることによる。

本書は三つの驚きが柱になっている。一八九〇年(明治二三年)というまさにこの同じ年の四月に芳賀矢一と立花銃三郎共編の『国文学読本』が、五月に上田万年の『国文学』が、一〇月に三上参次と高津鋏三郎の『日本文学史』が出版され、また同年五月からは落合直文・池辺義象・萩野由之編『日本文学全書』の刊行が始まった。しかしこの一八九〇年という時点で自国の文学史を有していた国は、ドイツ・フランス・イギリス・イタリアなどのヨーロッパのごく少数の国に限られていた。なぜ日本はこんなに早く自国の文学史を持つことができたのか。しかもヨーロッパでは、自国の文学史を著述することは文献学者としての最後を飾るようなライフワークであったのに、上記の文学史や日本文学選集の著者たちは、皆まだ二〇代の若者たちだった。——これが第一の驚きであり、本書はこの驚きから出発して、東京大学文学部には最初の日本文学史が生まれるためのいかなる条件が備わっていた

のかを精査する。

ついで、古典主義の一八世紀から歴史主義・ロマン主義・ナショナリズムの一九世紀へという世界的文脈の中で、日本の近世国文学から近代国文学への流れが分析されるのであるが、この分析の中で、第二・第三の驚きが提示される。すなわち、ドイツ国民文学の提唱者ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー（一七四四～一八〇三）と本居宣長（一七三〇～一八〇一）とが、またフランス・アカデミズムにおいて実証的な文学史研究の基礎を固めたギユスターヴ・ランソン（一八五七～一九三四）と芳賀矢一（一八六七～一九二七）とが、まったく同時代人であったという驚きである。とくに第二の驚きに関連して、「江戸時代、国学は、中国を信奉する主導的な学問に対して自国固有のものに正当性を伸長すべく戦った。それはあたかも一八世紀末葉の、フランスの〈文シニエマ明シニエマ〉に対するドイツの〈文化カルトゥーア〉の解放という構図を想起させる」と指摘されていることは重要であろう。

ロズラン氏は、近代日本における文学史の誕生を、一九世紀ナショナリズムの潮流や西洋列強の脅威にさらされた日本という世界的文脈の中で分析している。しかし、日本のナショナリズムのその後の不幸な結末を觀た現代の高みに立って裁断するのではなく、最初の日本文学史を創成した「大志を抱く青年たち」の、一八九〇年当時の時代状況のなかでのその心情に立ち入って、共感しながら書いている。この点が、二宮正之氏が『文学の弁明』（岩波書店、二〇一五年）の第一篇「文学のために——現代フランスに見られる「文学」再考の動き」（傍点強調藤原）において本書を取り上げ、「温かい文学研究」と評した所以がある。それは、ロズラン氏が「文学」を大切にしているということである。氏はジャック・ランシエールの次のような言葉を引用している。

私たちが、もはやあえて問おうとはしなくなったような問いがある。最近、あるすぐれた文学理論家が教えてくれたのだが、いまどき「文学とは何か」などと銘打った本を書くためには、ばかばかしさを恐れていてはならないというのだ。私たちにはもう遠い昔になってしまったような時代に、サルトルがまさにそういうタイトルの本を書いたのだが、しかし彼にしても、少なくともその問いに答えを出さないでおくだけの分別は持ち合わせていたようである。（Jacques

Rancière, *La Parole muette*, Hachette, 1998.)

また氏はマルク・フュマロリの「文学とは、一九世紀にある特別な威光に包まれた地位に据えられたが、二〇世紀にはその地位がまことにはかないものであることが明らかになったようなものである」

(Marc Fumaroli, *L'Âge de l'éloquence*, Droz, 1980) という言葉も引用している。ロズラン氏も「文学」をめぐるこんにちのこうした議論を意に介さずにいるわけではない。しかしその上でなお、これまで私たちが「文学」と呼んできたものを「文学」として認め、大切にしようという姿勢を明確に示しているのである。

ただしここでいう「文学」は、ヨーロッパで一八世紀後半から用いられるようになり、明治以後日本でも用いられるようになった意味でのものである。ロズラン氏によればそれまでの語(Littérature)は学問一般、教養などを意味していたのだという。

たとえば西郷信綱氏の『国学の批判』(未來社、一九六五年)に「国文学は文学を研究対象とする学問であるべきなのに、文学が見失われ、文学にとっては非本質的な部分の研究、つまり文献学や書誌学を本道であるかのように見なす考えがますます強化されてきている」という一文がある。かつては、ここで言われているような「文学」という言葉は、定義はしにくいけれども意味は自明で、西郷氏のこの発言に共感した人も少なくなかったと思われるのであるが、こんにちではこういう「文学」という言葉の使い方は、どうも敬遠されるようになった。あるいは『紫式部日記』を「日記文学」などと称することは、一九世紀ロマン主義に由来する近代的な「文学」概念を押しあてたものだ、というような批判もある。しかし『紫式部日記』にしても『源氏物語』にしても、現代の私たちを感動させ、人と世の中について深く考えさせるものがたしかに表現されているのであって、しかもそれは、私たちがこの「文学」という概念を所有することによってこそ、より明瞭に見えてきたものなのだと、言っても過言ではないであろう。『源氏物語』をもっぱら歌書として読んでいたような中世的な読み方も、あるいは「もののははれ」に集約した宣長の読み方も、『源氏物語』の本質やその豊かさをじゅうぶんに汲み尽くし得た読みだとは、言い難い。(1) 近代の私たちよりも近代以前の読者のほうが『源氏物語』をほんとうに読めていたなどとは、一概には言えないのである。

新潮日本古典集成『本居宣長集』の「解説「物のあわれを知る」の説の来歴」で日野龍夫氏は、『源氏物語』は宣長によって初めて勸善懲惡論から解放され、『文学』としての取扱いを受けたということができる」と述べているが、ロズラン氏も宣長の「物のあはれ」論の中に近世日本における「文学」という概念の「原概念」<sup>フロンティア</sup>の形成をみることができるとしている。が、日野氏は一方で「宣長の『源氏物語』理解はかなり平板なものであったと評せざるを得ない」とも述べている。つまり、宣長が『源氏物語』の内に発見できたものと、そこから汲み尽くし得なかったものと、そのいずれをも指示し得る概念として、私たちはこの(2)「文学」という輪郭も内容も曖昧な概念を手放すわけにはいかないのである。

(藤原克己「文学」という言葉とその概念について」による。一部改変した。)

問一 傍線(1)「近代の私たちよりも近代以前の読者のほうが『源氏物語』をほんとうに読めていたなどとは、一概には言えないのである」とあるが、なぜそのように言えるのか説明せよ。

問二 傍線(2)「文学」という輪郭も内容も曖昧な概念」とあるが、「文学」と「文学」ではないものの境界に位置づけられるであろう事例を挙げて、あなた自身は「文学」とはどういうものであると考えるか五〇〇字程度で説明せよ。

(問題以上。答案用紙のみ提出のこと)

言語文化学科(中国語圏言語文化プログラム)

次の文章を読み、後の問いに答えよ。

日本語で「文法」と訳している英語の grammar は、もとはギリシヤ語の「文字 (gramma)」を読み、書く術」に由来する語で、本来は「文字を正しく書く法」という意味だそうです。中国の文献をみると、清末の俞樾 (一八二一～一九〇六) が「文法」という語を用いています。俞樾は浙江德清 (いま浙江省德清県) の人で、道光三十年 (一八五〇) の進士です。王念孫・引之父子の学風を継いでいくつかの書を著わしましたが、そのうちの一つ、『古書疑義挙例』七巻は王引之の『経伝釈詞』を継承した著述です。ただ、引之の書がもっぱら虚詞を説いたのに対し、この書は虚詞だけではなく、文章の構造という視点から「文言」(白話(口語)に対する文語)の文章について論じることには意を注いでいる点が特徴です。全部で八十八条にわたって述べられていますが、そのうちの①「錯綜成文例」という条では「文法」という用語を用い、「古人の文は、その辞を錯綜(複雑に入り組む)させて、以て文法を現すものである」と述べています。

その錯綜の例として、漢の劉安(前一七九～一二二)の『淮南子』「主術篇」にみえる「夫疾風而波興、木茂而鳥集」(疾風が吹いて波がおこり、木が茂って鳥が集まる)という文を挙げ、「疾風」(はやく激しい風)は、現代の表現にしたがえば「修飾語+被修飾語」(修飾構造)を示す一方、「木茂」(木が茂る)は「主語+述語」(主述構造)の文であって、このように一文のなかに二つの構造が「錯綜」しているのは、「古人文法之変」であると説いています。

もう一例を挙げます。これは「倒句例」という条にみえます。俞樾は「古人は多く倒句を以て文を成す者があり、これを順に読めば解を誤る」と述べて、孔子に学んだ左邱明が『春秋』—春秋時代、孔子あるいはその教えをうけた魯の国の史官が編んだ編年体の歴史書です—の本文の内容をさらに詳しくした『春秋左氏伝』の昭公十九年にみえる「室于怒、市于色者」(室に怒り、市に色すとは)や、戦国時代の初め(前五世紀ごろ)の墨翟の著と伝えられる『墨子』「非楽篇上」の「野于飲食」(野に飲食す)を挙げています。これらの例では、介詞(前置詞)の「于」の目的語である「室」「市」「野」がその前に置かれ、動詞の「怒」「色」「飲・食」がそのうしろに位置していますが、普通は「飲食于野」などのようになります。これを「倒句」と呼んだのです。

以上の例からもわかるように、俞樾のいう「文法」とは、いわば「文章法」のことで、私たちがいう「文法」とは違う内容のものでした。それらの研究成果をふまえて、やがて体系的な「文法書」が中国で著わされることとなります。『馬氏文通』です。

## 『馬氏文通』—文法書の誕生

【著者について】著者は馬建忠ばけんちゅう（一八四五—一九〇〇）、江蘇省丹徒（いま江蘇省丹徒県）の人で、『文獻通考』—古代から宋代にいたるまでの諸制度の沿革を記した一種の百科全書で、唐・宋時代の制度史研究にとってなくてはならない書とされています—の撰者である元げんの馬端臨ばたんりんの第二十世の子孫だそうですね。洗礼名をマチアスというカトリック教徒でしたが、幼少のときから塾に通って伝統的な教育を受け、科挙のための受験勉強もしたといえます。

一八五二年、馬氏は上海郊外にあるカトリック系の徐匯公学じょゑい（のちの震旦大学しんたん）に入学し、ここで伝統的な文言のほか、人文・自然科学や、ラテン語・ギリシャ語・英語・フランス語の教育を受けました。一八七七年、三十二歳のときに政府留学生団の随員としてフランスに派遣されましたが、そのとき彼はすでにフランス語を流暢りゅうちやうに話せたといえます。一八八〇年の初めまでヨーロッパに滞在したのですが、主としてパリで勉強しました。一八七九年にはパリ法科大学から法学士の学位を受けたのですが、そのとき提出した三部から成る論文の第一部はラテン語で書いたといわれています。また一八九五年には、日本の下関でおこなわれた日清講和交渉のときに随員の一人として来日したこともあります。

【著述の背景】全盛を誇っていた清朝も、十九世紀の半ばごろには衰えの兆しをみせはじめました。社会の各層に矛盾が生じて国内では反乱がおこり、国外からはヨーロッパの強国からの圧力が強まりました。一八四〇年にはイギリスとのあいだで阿片戦争アヘンがおこり、一八五六年にはアロー号事件（アロー戦争）に清朝は敗れ、一八六〇年、馬建忠が十五歳のときには、北京はイギリス・フランスによって攻められ、清朝は両国から、天津の開港とイギリスへ九竜半島の一面を譲りわたすという、屈辱的な条約（いわゆる北京条約）を迫られました。

ヨーロッパの強国の実力を目のあたりにした清朝政府や多くの知識人たちは、あらためて先進の諸外国への目を開き、中国を救うには外国に学ぶほかはないと認識するようになったのです。馬建忠もその一人でした。馬氏は、中国を富強にするためには西洋の先進技術を学ばねばならず、そのためには中国での古い教育や学習の方法の悪いところを直し、児童たちが儒教という聖人や賢人たちの著わした古典を、多くの時間をかけずに合理的な方法で学ぶことが必要だと考えました。そしてそれを実現するには、

②ヨーロッパの言語の法則を基準としながら、経書のなかに隠されている構造の法則、つまり中国語の確かな文語文法を築きあげなければならぬと考えるに至ったのです。

（大島正二『中国語の歴史』より一部改変して用いる）

問一 傍線部①「錯綜成文例」とはどのようなものか、本文に基づいて二百字以内で述べなさい。

問二 傍線部②について、このような方法にあなたは賛成しますか、それとも反対しますか。その根拠を含めて六百字以内で述べなさい。

令和6年度 お茶の水女子大学 文教育学部

学校推薦型選抜 帰国生徒・外国学校出身者特別選抜 試験問題

言語文化学科(英語圏言語文化プログラム)

次の設問に英語で答えなさい。答えは答案用紙に記入しなさい。

These days many people do not vote in national elections. Discuss the importance of voting, considering why some people vote, while others do not.

令和6年度 お茶の水女子大学 文教育学部 学校推薦型選抜 試験問題  
言語文化学科(仏語圏言語文化プログラム)

[問い] AI（人工知能）による自動翻訳が発展した現代において、外国語で書かれた書物を人間が自力で翻訳することにどのような意義があるかについて、複数の具体例を挙げつつ1200字以内で論じなさい。



令和6年度 お茶の水女子大学 文教育学部  
学校推薦型選抜 帰国生徒・外国学校出身者特別選抜 試験問題  
人間社会科学科(教育科学プログラム)

《注意事項》

1. 監督者の指示があるまで解答を開始しないこと。
2. 試験問題は、この表紙を含めて3ページあります。
3. 答案用紙は1枚あります。
4. 試験問題および下書き用紙は持ち帰ること。

次の文章は、教育におけるデジタル技術の活用について書かれたものである。以下の文章を読んで、下部の問いに日本語で答えなさい。

この部分に記載されている文章については、著作権法上の問題から掲載することができませんので、ご了承ください。

この部分に記載されている文章については、  
著作権法上の問題から掲載することが  
できませんので、ご了承願います。

(注) multifaceted : 多面的な    proficiency : 習熟度    tout : 大げさに宣伝する    ubiquity : 至る所に存在すること  
heterogeneity : 異質性    procurement : 調達

(出典) UNESCO (2023) *Global Education Monitoring Report Summary 2023: Technology in education: A tool on whose terms?*, Paris, UNESCO. (一部改変)

問1 : 下線部(1)~(4)を日本語に訳しなさい。

問2 : 下線部①、②の内容を本文に則して簡潔に説明しなさい。

問3 : 下線部(a)と(b)、双方の主張を説明したうえで、(a)、(b)のどちらの見方を支持するか、あなたの考えを述べなさい。

令和6年度 お茶の水女子大学 文教育学部  
学校推薦型選抜 帰国生徒・外国学校出身者特別選抜 試験問題  
人間社会科学科(子ども学プログラム)

《注意事項》

- 1 監督者の指示があるまで解答を開始しないこと。
- 2 指示に従って、配付物の枚数を確認すること。  
試験問題:表紙を含めて4ページ  
答案用紙:2枚  
下書き用紙:2枚
- 3 試験中、用のある場合は手を挙げて監督者を呼ぶこと。
- 4 問題の指示に従って答案用紙に解答すること。
- 5 解答の際、冒頭の欄(□)に問題番号を記入すること。
- 6 試験問題および下書き用紙は持ち帰ること。

問題 1

次の英文資料を読んで各設問に答えなさい。

この部分に記載されている文章については、  
著作権法上の問題から掲載することが  
できませんので、ご了承願います。

出典 : Mezmur, B. D. (2020). The African Children's Charter @ 30: A distinction without a difference?.  
*The International Journal of Children's Rights*, 28(4), 693-714. (一部改変)

注 : poise = つり合いをとる    proffer = …を申し出る    demography = 人口統計学    leitmotif = 動機、主題

- (1) 下線部①および下線部②を和訳しなさい。
- (2) 下線部④の理由について、資料の内容も考慮して説明しなさい。

## 問題 2

次頁の資料は、外国籍児を保育する現場に発生している問題の事例と対応について 4 項目に分けて述べた文章のうち、2 項目を抜粋したものである。文章の内容に基づき、どのような「言語コミュニケーション」が重要であるのかについて、子どもと保護者の両方に触れながら論じなさい。(400 字程度)

2つ目の問題は、生活習慣に関するものである。日本の保育園でよく行われている薄着保育に否定的な保護者が多く存在することや、ピアスをつけている子どもの存在などが、事例としてあげられている。南米出身者の子どもは冬場には保護者に厚着をさせられて登園する傾向が強い。したがって冬のあいだは着膨れして動きにくく、脱がせると保護者から苦情がでることもある（塩野谷 2004）。子どもを非常にかわいがるといわれる南米の保護者にとっては、健康面の心配が大きいようである。ピアスの問題についても、南米ではピアスには魔除けの意味があり（塩野谷 2004）、乳児のときからピアスをつけてくることがある。日本の保育園の立場からは、子ども自身が誤って飲み込む危険性などから、外すことを望む傾向が強く、保護者との摩擦も発生する。また、新倉（2001）は、毎日入浴する習慣がなく、身なりを清潔にできない外国籍児についての問題もあるとしている。さらに南米出身者には、良くいえば時間におおらかな傾向が見られ、行事の際などにも遅刻をしていくことが問題点として多く取り上げられている。

薄着保育に関しては、外国籍保護者の目のない時間帯すなわち登園後には薄着にさせて、お迎え前にはまた着せておくという対応をする園もあるという（塩野谷 2004）。また、薄着保育の利点やピアス着用の危険性、時間を守ることの大切さ等を簡単な単語や絵を用いて説明している。このように、外国籍児を保育する現場では、生活習慣の違いから発生する問題が多い。

こうした問題への対応として、保育者が根気よく保護者に説明し、理解が得られるよう働きかけているが、言語コミュニケーションがうまくいかず、説明をしても理解してもらえない場合には、保護者の意向を容認せざるを得ないのが現状である。ここでも、お互いの文化を説明するため、また理解するための言語コミュニケーションが重要となってくる。

#### 〈中略〉

外国籍児の保育に関して取り上げられている問題の4つ目は、言語コミュニケーションに関するものである。言葉が通じないことで、子どもの気持ちが読み取れないことや、保護者との間で誤解が生じるという事例が多い。また、日本語と母語の間で戸惑う子どもと、母語も日本語も両方を話せることを望む保護者との考え方の相違もあげられている。大場ら（1998）は、日本語を話し、日本人児童とも遊んでいた外国籍児が、あるときとっさに母語を話してしまい、それを「変な言葉」と他の子に囁き立てられた事例に触れている。その後、この外国籍児は場面緘黙になり、結局卒園するまで保育園では一度も言葉を発することはなかったと述べている。

中川（2003）は多文化共生保育の困難さについて、言葉が通じなくて子どもの気持ちが汲みとれないことや、園便りを書くことの大変さ、連絡が思うように伝わらないなどをあげている。久富（2004）は日常では登降園時にしか接触できない上に、言葉も通じない外国人の親との関係を築いていくことの難しさ、そこから生まれてくる子どもへの影響は避けられないと述べている。

言語コミュニケーションに関わる支援は、書類を外国語で用意したり、園便りや掲示物などにひらがなやカタカナ、ローマ字でルビを振るなどしている保育園もある。また、身振り手振りでなんとか意思の疎通を図る場合や、絵や実物を見せて、説明する場合もある。さらに、通訳ボランティアの派遣や通訳の配置などで対応している保育園もある（中川 2005）。これらの対応の中でよく行われているのが、日本語がわかる同国の保護者に通訳を依頼することである。しかし、保護者に通訳をしてもらうことは、単なる情報の伝達であればよいが、プライバシーに関わる問題であるならば、躊躇せざるを得ないのではないかと考えられる。

また、通訳の配置や派遣のない園では、保育者が外国語を覚え、意識的に外国語で話さない限り、外国籍児は保育園において母語を話す機会がない。外国籍児は、その多くが長時間保育であるため、日本語の方が話しやすくなり親子のコミュニケーションに問題が生じる場合もある（中川 2003）。また、ほとんどの親は母語を習得・維持させたいと考えているが、子どもが母語を忘れてしまう、母語に関心がないという悩みを持っており、次第に親子のコミュニケーションが難しくなるという問題に発展することもある（武田 2007）。

言語コミュニケーションの問題は、多文化共生保育の現場に発生するすべての背景に関わっていると考えられる。なぜなら、地域住民と関わる時、生活習慣や食習慣の違いに関してお互いの意見を交わすとき、言葉が重要な役割を持つからである。

令和6年度 お茶の水女子大学 文教育学部  
学校推薦型選抜 試験問題  
芸術・表現行動学科(舞踊教育学専修プログラム)

《注意事項》

- 1 監督者の指示があるまで解答を開始しないこと。
- 2 試験問題は、この表紙を含めて2ページあります。
- 3 答案用紙は2枚あります。
- 4 各問題で指定された答案用紙に解答すること。
- 5 試験問題および下書き用紙は持ち帰ること。



学校推薦型選抜 試験問題

芸術・表現行動学科（舞踊教育学専修プログラム）

- I. 文部科学省は我が国の初等・中等教育において創造性の涵養を一つのテーマとして掲げている。しかし2017年の民間の調査では、自分たちが創造的だと考えている日本の生徒（中高生）の割合は8%であり、アメリカは47%、イギリスは37%、オーストラリアは46%、ドイツは44%、グローバル平均は44%という結果が示されている。
- 1) 上記の調査結果を踏まえて、日本の学校教育についてあなたの考えを述べなさい。(25点)
  - 2) 学校教育におけるダンスの授業において、あなたはどのような時に自分の創造性が育まれると考えますか。あなたの考えを具体的に述べなさい。(25点)
- II. 次の英文を読み、設問に答えなさい。
- 1) 下線部を訳しなさい。(10点)
  - 2) 農村ではどのように舞踊が伝承されていると述べられているか、本文に即して述べなさい。(20点)
  - 3) 第二次世界大戦後、農村の舞踊には、どのような変化が生じたか、本文に即して述べなさい。(20点)

この部分に記載されている文章については、  
著作権法上の問題から掲載することが  
できませんので、ご了承願います。

kinaesthetically 運動感覚によって vocational instruction 職業的訓練 rites 儀式 choreographer 振付家

Lange, Roderyk, "Dance Folklore and Non-Professional Dance", *Dance Studies* vol. 14, Center for Dance Studies, 1990.  
(一部改変)

令和6年度 お茶の水女子大学 文教育学部  
学校推薦型選抜 試験問題  
芸術・表現行動学科(音楽表現専修プログラム)

問題

次の文章を読んだ後、以下の設問に答えてください。

この部分に記載されている文章については、  
著作権法上の問題から掲載することが  
できませんので、ご了承願います。

出典： Christoph von Blumröder, “Xenakis and the Echoes of War,” *Bulletin of the Transilvania University of Brasov, Series VIII: Performing Arts*, 2022, Vol. 15, Issue 1, pp. 39–44. (問題文作成のため一部改変をほどこした。)

<sup>1</sup> Iannis Xenakis: ヤニス・クセナキス(1922–2001)、ギリシャ系の現代音楽の作曲家

- 問1 下線部(1)を日本語に訳してください。
- 問2 下線部(2)を日本語に訳してください。
- 問3 下線部(3)を日本語に訳してください。
- 問4 下線部(4)を日本語に訳してください。
- 問5 下線部(5)に *these occurrences* (複数形)とありますが、その具体的な内容を1つ本文に即して述べてください。
- 問6 18世紀後半以降、とりわけウィーン古典派以降の世代の作曲家の場合、(しばしば無批判に)その作品と生涯が結び付けて考えられる傾向があります。この理由について、400～500字で考察してください。